

澤井一彰『オスマン朝の食糧危機と穀物供給——16世紀後半の東地中海世界』（山川世界史モノグラフ 30）
山川出版社 2015年 253+51頁

本書は、16世紀後半のオスマン帝国を中心とする地中海世界における穀物問題に着目し、穀物流通をめぐる様々な問題を通して当時のオスマン社会、ひいては地中海世界の諸相を明らかにしようとする著者の意欲的な研究の成果をまとめたものである。地中海世界といえば、かのブローデルの名著『地中海』が想起される。本書もまた、ブローデルに触発され、この古典的名著へのひとつの挑戦であることが序論において明言されている。それゆえ、読者はこの試みがどのような結果を生み出すことになるのか、期待をもって読み進めることになる。

本書は著者の博士学位申請論文をもとに構成されている。一部すでに単独の論文として発表された内容も含まれているが、本書の執筆にあたり大幅に修正されている。構成は以下のとおりである。

- 序論 オスマン朝史研究と新たな「地中海世界」像
- 第I部 16世紀後半におけるオスマン朝の食糧事情とイスタンブル
 - 第1章 「食糧不足の時代」とオスマン朝の食糧事情
 - 第2章 イスタンブルへの人口流入とその対応策
- 第II部 オスマン朝の穀物流通システムと東地中海世界における「穀物争奪戦」
 - 第3章 イスタンブルにおける食糧不足と穀物供給
 - 第4章 穀物問題にみるオスマン朝と地中海世界
- 結論 つながる地中海世界、隔たる地中海世界

序論において本書の目的と意義が語られる。著者は目的として2つの課題をあげている。1つ目は、穀物流通をめぐる諸問題を通して、16世紀後半のオスマン帝国、イスタンブルの都市社会、広くは地中海世界の実相を明らかにすることである。これは土地制度史中心であったオスマン帝国社会経済史研究の空白を埋め、あらたな分野を開拓することにもつながるといふ。2つ目は、これらの成果を地中海世界全体にあてはめ、ブローデルの『地中海』の再検討をおこなうことである。オスマン帝国史と向き合うことにより、ブローデルの残した課題である地中海世界の西と東との真の統一的な把握を実現することである。ゆえに考察対象としては、地域をオスマン帝国・地中海に限定せず、黒海を含めた地中海の東部地域とする。また、時代については16世紀後半(1560～1590頃)としている。この時代設定には史料の問題が深く関わっている。序章の最後に詳細な史料解題が付されている。特に主要史料であるオスマン朝枢機勅令簿について、その有用性と史料の限界が丁寧に説明されている。

第I部は2つの章から成る。第1章では、ブローデルの手法を踏襲し、まず本題の前提として16世紀後半の地中海世界の「環境の役割」、すなわち気候の寒冷化とそれを背景とする食糧不足の問題が検討される。「環境と歴史との関係性がいかに重要であるかを説いたブローデルの視点は、当時としては極めて斬新なものであった」としつつも、「時代的な制約による一定の限界や考察の不足も垣間見られる」(p.38)と言う著者は、最新の自然科学研究の成果から16世紀後半が寒冷化の時期であったことを確認する。そして、その影響をブローデルの研究成果に依拠して当時の食糧不足の事例をあげながら述べていく。さらに、ブローデルが取り上げていないオスマン帝国領について、寒冷化による自然災害、飢饉や食料不足の実態を350件余りの枢機勅令簿の記録から詳細に語っていく。そして気候の変化が食糧不足を招いた背景に人口増加という要因があったことを指摘している。ただ、16世紀後半の飢饉・食糧不足の実例を時系列的に数多く挙げている点は、意図は理解できるもののやや冗長である。発生の多さは図5(p.84)で確認できるので、実例はむしろ絞り込んだ方が読者へのインパクトは強まるのではないだろうか。

第2章では、重大な社会問題へのオスマン政府の対応策が検討される。まず16世紀後半のイスタンブルの人口増加とそれに起因する食糧不足、治安の悪化を枢機勅令簿から確認し、その対策として政府が実施した食糧輸送、治安回復策を具体的にあげていく。これにより先行研究で看過されてきた人口増加と前述の社会問題との因果関係が明らかとなった。

第Ⅱ部は2つの章より成る。第3章は、帝国各地からイスタンブルへの穀物供給ネットワークが主題となる。ここで示された物資流通システムは、オスマン朝古典期のモデルケースであると著者は述べている。「1 16世紀後半におけるイスタンブルの食糧事情」では、膨大な人口規模を抱えるイスタンブルは巨大な消費都市であったが、その食糧事情は外部からの供給、すなわち穀物などの輸送に大きく依存していたとし、1559～90年の30年間の枢機勅令簿の記録を網羅的に分析した結果、16世紀後半のイスタンブルの食糧事情は気候と共に季節によって左右されたことが指摘される。「2 「イスタンブル穀物供給圏」の広がり」では、イスタンブルへの穀物輸送の実態、どの地域から、どのようなルートで穀物が帝都に運ばれたのかを解明した。著者は輸送コスト・所要時間に注目し、イナルジュクやブローデルの見解に異議を唱えている(pp. 148-149)。「3 穀物の種類と輸送手段」では、イスタンブルへ輸送されていた穀物の種類と割合、輸送方法(輸送システム)が明らかにされた。輸送方法といったハード面では、特に海上輸送に用いられた船舶についてその種類と特色が詳細に語られている。ソフト面では、物流システムに携わった人々について、レンチベルという私有商船が輸送に従事し、官有船舶は用いられなかったというが、この点は注目に値する。こうした民間の業者について、著者はムスリムの非ムスリムに対する優位を指摘し、従来オスマン帝国の海運は非ムスリムが担っていたという通説に一石を投じている。興味深い見解であるが、根拠となる史料が枢機勅令簿の第37巻1冊にとどまっているのは、いささかこころもとない。さらなる検証が必要となろう。とはいえ、本章でなされた穀物輸送の積み出し港の詳細な分布や船に関する情報は、海上交通史にとっても重要な情報源となることだろう。

第4章では、ブローデルの「小麦の諸問題を研究することは、地中海の生命の弱点のひとつをつかまえること」という言葉を引用し、穀物問題の重要性があらためて指摘される(p. 184)。ブローデルは「トルコの諸問題がきちんと提起されない限り、地中海の規模で結論を下すことにはためらいがある」とも述べている。といたうえて、著者はまさにこの問題に真正面から切り込み、枢機勅令簿を武器に実証を試みる。この章はオスマン朝をめぐる地中海での穀物争奪戦を論じているが、まず「1 穀物争奪戦の舞台としての地中海世界」で、16世紀、地中海諸国は穀物不足をオスマン帝国領からの輸入に依存していたが、1555年頃からオスマン帝国は穀物の輸出を禁止したため以後密貿易が横行したこと、また、領内での不正輸送もオスマン帝国を悩ませたことが語られる。次に、「2 オスマン朝領内における不正輸送」でその実態が明らかにされる。発生件数の推移、食糧不足との相関関係、対策などが具体的な事例で示される。船長たちへの保証人制度、積出港の限定、受領証の発給、城兵の乗り組みによる監視、臨検、厳罰化などが、豊富な事例から詳細に検討されている。「3 ヨーロッパ諸国への穀物密輸」では、密輸が行われた地域の分布、その発生件数はどのように推移したのかを勅令簿の記録から集計し提示する。その上でこの問題がオスマン政府にとって内政・外交上いかに重要な課題であったのかを確認される。最後に著者は、穀物問題が16世紀後半の地中海世界において、様々な要因が重なり合って発生し継続した極めて複合的な現象であったと述べて、この興味深い「地中海世界」の考察をしめくくっている。

本書について評者は3つの点に注目した。1点目は、「ブローデルへの挑戦」である。ブローデルの『地中海』が世に出た時、オスマン帝国史研究者の多くは、金の鉱脈を掘り当てたかのような心地がしたのではないだろうか。ブローデルによって「地中海世界史」という新たな歴史研究領域が「発見」され、長大な時間的スパンで全体史を把握するという課題が提示された。そしてそのクライマックスの時代において地中海世界に君臨していたのが、自分たちの専門であるオスマン帝国なのだから。ブローデルの築いた『地中海』という金字塔に敬意を払いつつも、誰もが指摘するのはその関心が地中海の西部に偏っていることである。彼の業績に挑もうとするならば、そこにこそ活路が見出しようといえる。著者は「16世紀後半の地中海世界を扱った研究については、『地中海』を凌駕する著作はいまだ世に出されていないと言っても過言ではない。」(p. 6)と高く評価しているが、それでも「まったく非の打ちどころのない研究」ではなく、最大の課題は「オスマン朝についての言及が極めて限定的」なことであるとしている。この点については鈴木董も指摘するように[鈴木1997: 26-28]、トルコ人を中心とするオスマン史研究者が早くから異議を唱えてきたところである。しかし、今やブローデルの時代には望むべくもなかった最新の史料データベースを駆使することによって、この課題を克服し、地中海世界の全体像を描き出すことも可能となったとする著者は、ブローデルが取り上げた「フェリペ二世の時代」すなわち16世紀後半において、「地中海沿岸部の3分の2以上を領有して

いた」(p.6) オスマン帝国の穀物問題に着目する。その上で、最新の科学的データに基づいて当該期の気候の寒冷化を確認し、その影響をオスマン語史料から考察した。内容は前述したようにきわめて詳細で多角的である。西欧側史料との接合も試みられているゆえに、穀物問題については地中海の全体史が描かれたと言っても過言ではない。ただ、著者は本書の意義をブローデルが残した課題と向き合う試みの第一歩であると述べている。そうであれば、終章において、どの程度歩みが進んだかについて、具体的に読者に説明する必要があったのではないか。

2点目は、「環境歴史学」への取り組みである。もとより自然環境・気候変動をふまえ、自然災害に人類がいかに対峙してきたかを先人に学ぶことは歴史学の使命である。本書は著者自身が標榜するように「環境歴史学」という近年とみに関心の高まりをみせている新しい分野の研究成果である。我が国において東日本大震災以後そうであったように、トルコでも1999年のイズミト地震をきっかけに過去の歴史を防災対策に活かそうという動きが高まった。しかしながら、近年、アヤロンの『オスマン帝国の天災——伝染病、飢饉、その他の災厄』[Ayalon 2015] や、ゲルシュテの『気候はいかに歴史を造ったか』[Gerste 2015] のトルコ語訳[Gerste 2017] などはあるものの、オスマン帝国史ではまだそれほど重要な研究は見あたらない。そうした中で著者はかなり以前から一貫してこの問題に取り組んでおり、本書はその到達点とも言える。エヴァンズは『力の追求』において、19世紀のヨーロッパにおける「自然の征服」に注目し、「自然災害や飢饉、疫病に対応する能力」を国家の力量とむすびつけ、その実現は平和のもとでのみ可能であるがゆえにナポレオン戦争以後のほぼ100年間ヨーロッパにおいて大国間の対立は抑制的であったと述べている[エヴァンズ 2018]。本書では、気候の寒冷化が引き起こす食糧不足、密輸の増加といった様々な問題に対して、オスマン政府がいかに的確に対策を講じていたかが繰り返し指摘されている。飢饉、自然災害への対応力が国家の力量のバロメータとなることを、著者は本書を通じてオスマン帝国史の分野で証明したといえよう。

3点目は、「枢機勅令簿」という史料の重要性、あらたな「使い道」を提示したことである。本書の中核史料である「ミュヒンメ・デフテル Mühimme Defter」とは、御前会議の決定を勅令の形式で記録した台帳で、「枢機勅令簿」という訳語が近年定着しつつある。これまでもオスマン帝国の特に前近代史を語る上できわめて重要な史料とされてきた。ただし、御前会議という国政の最高意思決定機関の議事録的性格から、政治、行政、軍事、外交といった領域の研究に用いられることが多かった。本書は、分析対象となる16世紀後半の台帳のすべてを渉猟し、この時代に見られた「食糧不足」と気候変動との関係をミクロ、マクロの視点から明らかにした。すなわち、着眼点を変えれば新たな「使い道」がいくらかでもあるという可能性を提示したのである。

本書のような研究はともすれば個別実証主義に陥りがちであるが、本書は「ブローデルへの挑戦」という目標を常に念頭に置いたゆえに、地中海世界の全体像を描くという野心的な試みに成功したといえよう。

〈参考文献〉

- 鈴木董 1997『オスマン帝国とイスラーム世界』東京大学出版会。
- エヴァンズ, リチャード・J. 2018『力の追求——ヨーロッパ史 1815–1914 (上・下)』(井出匠・大内宏一・小原淳・前川陽祐・南祐三訳) 白水社。
- Ayalon, Y. 2015. *Natural Disasters in the Ottoman Empire: Plague, Famine, and Other Misfortunes*. N.Y.: Cambridge University Press.
- Gerste, Ronald D. 2015. *Wie das Wetter Geschichte macht : Katastrophen und Klimawandel von der Antike bis heute*. Stuttgart.
- . 2017. *Hava nasıl tarih yazar: antikçağdan günümüze iklim değişiklikleri ve felaketler*. (tr.) M. Karaismailoğlu. Istanbul.

(小松 香織 早稲田大学教育・総合科学学術院教授)